

四
門
会

第 3 号

聖マリアンナ医科大学
耳鼻咽喉科学教室同門会

四 門 会

目次

一、地震・雷・火事・オヤジ	竹山	1
二、遺された笑顔	小野泰三郎	2
三、私の好きな本「星の王子様」	中島久美	4
四、中央本線に乗る時には	橋本久子	5
五、がんセンター研修を終って	菅野澄雄	5
六、秋に想う	渡辺昭司	6
七、国際オーロロジー会議に出席して	吉野清美	7
八、サンパの国、ブラジルへ		
― 国際学会に参加して―		
九、バラニー学会前後	岩武博也	8
十、平成三年度新入医局員自己紹介	岡田智幸	10
勝見直樹・宮部 聡・小松崎 靖		
十一、平成二年度教室業績集		13
十二、平成四年度本院外来担当医表		21

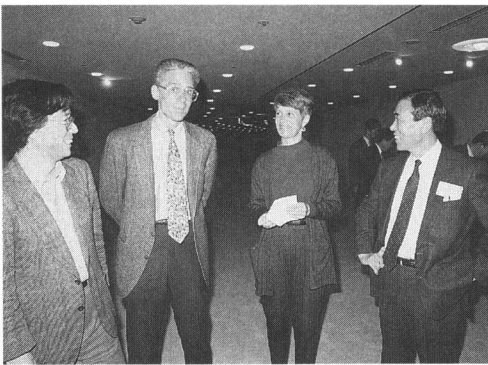


十三、医局員住所録	22
十四、関連病院住所録	27
十五、編集後記	28



第50回日本平衡神経科学会

日時：1991年11月21・22日
於：パシフィコ横浜



竹山 勇教授開講15周年記念祝賀パーティー

日時：1991年11月23日

於：パシフィコ横浜



七段室を昇つて

こゝに十五年

於てい新たみ

初冬の室

一粒の積り

時をある十五年

育みし若木

繁みゆかあり

開講十五周年を記念して

平成三年十月二十三日



地震・雷・火事・オヤジ

竹山 勇



私達が子供の頃には世の中のコワイものとして地震・雷・火事・オヤジといった譬が(恐らく、古くからの多くの経験から得られたものでしょうが、)活かされた生活の知恵として教えられてきました。

大地震の恐怖と被害は誰しも想像できますし、現実を経験した方々のその恐れは想像を絶するものがあります。毎日、テレビで雲仙・普賢岳の火砕流の大きさが報道されており、島原地方の住民の思いはいかばかりであります。

江戸時代の古文書にも当時の噴火の様子が記されているという。その後、数百年も続いた休火山の状態がいつとはなしに恐れを薄れさせ、現今ではそれを等閑視し、開発された町村が周囲に出来たものと考えられます。「災害は忘れた頃に来る」という言葉は何か災害が起こる度に引用されるのですが、古来からの語り継がれた事実や戒めは謙虚に受け止め大切にしたいものと思えます。

地震、雷、火事に次いで親父ですが、戦後の民主化に伴い、父親の権威が地に落ちたとい

った声が聞かれますが、家長としての責任をもったオヤジの存在はお袋と共に健全な姿で家庭内に残しておき度いものと考えています。

昭和一ケタの時代に生れた私達は、戦前、戦中、戦後の時代に亘り少年期、青年期を通して現在までを過ぎてきたわけですが、私の幼少の頃などは父親の存在は威厳と一種のこわさを備えており、親しみと畏敬の念をもって接してきたと思います。社会一般をみても、全くの他人がよその家庭の子供達を注意したり、指導したり、叱ったりといった躰教育に対する風習は日常どこでも見受けられたもので、社会全体が若い世代に気を配ってくれた時代ともいえましよう。

オヤジはどうあるべきか、といったテーマがテレビ討論で取り上げられた事もあります。ここに徳川家康の「大将の戒め」といった内容を紹介したいと思えます。

『大将というものは、
敬まれているようでその家来に絶えず落度を
探られているものだ
恐れられているようで侮られ、親しまれてい

るようで疎んじられ、好かれていようで憎まれていものじゃ
大将というものは、

絶えず勉強せねばならずし、礼儀をわきまえねばならぬ、よい家来をもとうと思ふならば食をへらしても家来にひもじい思いをさせてはならぬ

自分一人ではなにも出きぬ

これが三十二年間つくづく思い知らされた家康が経験ぞ

家来というものは、禄でつないでならず機嫌をとってはならず遠ざけてはならず近づけてはならず、怒らせてはならず、油断させてはならぬものだ

「ではどうすればよいので」

家来には惚れさせねばならぬものよ

元和二年六月
(高久史磨記述より・中外製薬遠藤和男氏から借用)

この内容を玩味して読むほどに、オヤジといわれる多くの立場や職種にも当てはまり、江戸時代のみならず、現代社会にも通用する名言ともいえましよう。

教室員は教授をオヤジという習慣が旧くからありますが、私共が教授として多くの教室員を指導しながら、臨床、教育、研究に共に

助んでいく上に、この「いましめ」は自戒自訓の至言と思っています。

一人の個人個人の集団が社会を作り、国家を形成し、さらに地球→宇宙を創っていくのでしょうが、最小単位として存在する家庭や家族の一員であるオヤジも敬して畏れられ、

遺された笑顔



昨年の秋、東京を発った私は、空路を鹿児島に向かった。

予定時刻に鹿児島空港に到着した飛行機からは、数百の客が吐き出された。

ロビーはそれなりに込んでいたが、タクシー乗り場は空いていた。一人を待つだけで車中の人となった。

タクシーは空港から、完成後間もないという舗装道路を走りだした。

黒い透明感をもつほどに舗装されて間もない新道を走るのには、私の乗った車だけである行き交う車もなかった。ときとして目に映る白いセンターラインが黒い路面に浮かびあがり、路面全体を真新しい帯のようにさえ見せてくれる。

親しんで尊ばれる存在でありたいもので、さらに、社会を構成するあらゆる部署における管理職の立場でのオヤジが、立派な大将であってこそ一つの集団・社会や国家の繁栄が揺るぎなきものとなりましょう。

小野 泰三郎

坦坦とした道路を、速度を増すこともなく走らせる運転手の背には、規定の速度を頑なに守ろうとする姿勢がうかがえた。時間が勿体ない：：と思うのは、都会生活者のあわれな心根だろうか。

「お客さん、まっすぐホテルに行きますか」

「いや：：時間があるから、どこか案内してほしいんだが」

ホテルに直行するのは、まだ早い。

翌日からの学会に出席すれば、観光の暇はなさそうである。前日にまわっておこうという心づもりで、早目に東京を発ったのである。「それじゃ、桜島に渡ると時間も費用もかかりますから、島は湾から見ることにして、これから武家屋敷と知覧の特攻隊基地を見てく

ださい」という。古い家屋の見学は私の好みでもある。運転手に任せることにした。

車窓に映る南国の低い山並みは晩秋の午後の日ざしをうけて濃緑に染まり、その一色のまま稜線にまで達している。みはるかす山に続く緑が同じ色に見えるのは日ざしが弱いためか、それとも思いのほか稜線が近いということなのだろうか。

間もなく冬を迎えようという樹々には紅葉も見あたらず、緑のまま、大地を庇うがごとくに生い茂り、いささかの隙間も見あたらな。緑一色の中には、人の気配が露ほどもなかった。道路ちかくの低地はさらに暗い陰影をおとしている。

山は高くはないが懐が深く見えるためか、ひとたび樹海に迷い込めば動物の餌にでもなり果てそうに、森閑とした風情である。

「このあたりの窪地には虻でもいそうだね」

「いるでしょう。それより、この辺の山には熊がいますよ。狼もいたんですがね、近ごろはどうですか」

「熊がねえ：：山が深そう感じたものね、人家はまったく見あたらないし」

「毎年一頭ぐらいはとれるようですね」

こんなところで立往生したら、後続の車もないし：：などと、余計な心配をするほど、

自分の車以外には動くものがない。

車は信号のない新道を、空港から一時間あまり走り、静かな町並みに入っていた。

武家屋敷は狭い道路の両側にあった。小人数が通れるだけの道幅は、敵を防ぐには都合がよい。その狭い道路の入り口で車を降りた。武家屋敷は数段の石段の上にある。石段ののぼって一、二間進むと正面に石垣が築いてあり、道は右か左へ直角にまがる。その先に庭があり、家があった。

どの屋敷も、道から門を透して直接には玄関が望めない。これも外敵を考慮しての建築であろう。

屋敷は代代、その子孫が受け継ぎ、住まいと管理にあたっているとのことであった。

「これから知覧へ直行して、それからホテルへ参りましょう」

運転手が言った。

チェックインの時刻が気にはなったが、この地を知っている運転手の案内である。素直に彼のことばにしたがって車に乗りこんだが、知覧は遠かった。

依然として沿道に動くものは見あたらない。車は森の道を、ときとして峠の上から湾を望みながらひた走る。

やがて道幅が広くなり、町が近づいてきた。

路の両側に灯籠が並んでいる。夥しい数である。^{おびただ}

「これは遺族の寄進したものです。戦死した方の慰霊というわけですね」

運転しながら、彼は話してくれた。

車は左折し、公園風の広場の一隅に停^{とま}った。そこに記念館があった。

「ゆっくり見てください。ホテルには五時半には着きますから。ここから一時間ほどで行きます」

と運転手はいった。

発車までには一時間の余裕があった。

記念館に入った。

特攻隊員の写真、遺品の展示とともに、名簿には数多くの名が記されている。二十歳、二十一歳の小尉、中尉が多い。当時の私とは一、二歳の違いである。その彼らは、飛行機で死んでいる。

あのころはそうだった。苦しい、悲しい時期、そして暗い時代でもあった。

兵役の適齢が十八歳に下げられたときから終戦までは、私にも命の保証はまったくなかった。

「あと半年で卒業だ。卒業すれば輸送船に乗せられて海の藻屑だ」

昭和十九年の秋、動員工場の旋盤の陰で、

十八年という人生の短かき、あっけなさを友人と話し、涙したこともあった。

展示してある軍服も軍刀も、当時は毎日見ていたものである。戦闘訓練も盛んであった。

だが、今は時代が違うのだ。私は生きのびて、この平和のときに民間機で飛んできた。

飛行機を降りてからは車でここまで来た。飛行機と車で、楽にここまで来たのである。

記念館は特攻隊員の慰霊を目的としたものに違いないが、当時、同年齢であった者がこの展示を見て何を感じ、何を思うだろうか。

説明書きは、思い出したくない過去を思い起こさせるだけのものに過ぎないのではあるまいか。当時を知らぬ戦後育ちの人たちにとっては、別世界の出来事のように無関心ではなからうか。

苦しかった過去を思い起こすことも辛ければ、知らぬ者に知らしめることは、なお至難であると言わねばなるまい。

当時はむしろ、冷めた眼で軍人や戦争を見つめていた私は、遺影が何を語り、そして望んでいるかを考えずにはいらなかった。

彼らの大半は自ら納得し、従容として死をえらんだのである。

死についての納得は、彼らの思考において

極限であると同時に可能であったかもしれぬ。

だが、納得せざるを得ないほどに彼らを追い込んだものは何であったか。無謀な戦いの終結を怠り、驕りたかぶっていた軍閥政治の代償が、彼らを死へ追いやったのではなかったのか。

「なぜ、あなたは死ななければならなかったのだ。死ぬ気で生きぬくことも、あなたには不可能だったのだろうか。あまりにも高価な代償ではないか！」

死に追いやった者も、追いやられた者も、それぞれが天命とすれば、それはまた、避けることも不可能ではない天命ではなかったのか。遺された者にとっては、あまりにも悲しい結末ではないか。この悲しみをくり返してはならぬのだ。

混沌として思いは馳けめぐる。館内をひとめぐりして出口の近くに進んだ私は、何葉かの写真に目をとめた。

それは、少年兵の戯れてゐるものであった。どうみても十三、四歳の子どものしか思えない。

可愛い顔をしている。腕相撲をしているところ、犬と遊んでいる楽しそうな様子。その顔はいずれも汚れのない地蔵尊のそれである。何と、にこやかな笑顔であろう。

これが明日、片道切符の戦闘機で体当たりをしようという人間の顔なのだろうか。

悟りきった禅僧でも、死を目前にしてこのような顔でいられるものだろうか。

彼らの無心ともいえる笑顔は、この日かぎりのものである。ふたたび彼らの笑顔を見た人は、いないだろう。

私の好きな本『星の王子様』

中島久美



私が初めてサン・テグジュペリの『星の王子様』を読んだのは、確か小学生の頃だったと思います。それから、何度この本を読み返したのかはつきり覚えていませんが、幼い頃には他の童話と同じ様に、ただ面白かったという記憶しかありません。ゾウを飲んだウワバミの絵が、やっぱり帽子に見えた自分が少し悲しかったのは覚えていますが……。おとなになって読み返して見ると、幼い頃には感じられなかった不思議な透明感を感じます。そしてそれは読む度に、鮮明に純化していくようです。

私が作者のサン・テグジュペリに関して知っていることと言ったら、彼が空軍の操縦士

この写真は、見る人の胸を衝いてくる。その笑顔があどけないだけに、訴えてくるものは痛烈である。それは大斧で向かってくるものではなく、錐で胸を衝いてくるような悲しみである。

そんな思いに駆られた私は、足早に出口に向かっていた。

で、飛行機で空を飛んでいるうちに消息を絶ったと言う事ぐらいです。きっと作者は、空から人間達を見下ろしているうちに、つまらない事にひっかかって、『本当の事』の良さを知らずにいる人間のおとな達の馬鹿らしさを、つくづく情けなく思って、けれど限りなく優しいまなざしでおとな達を見つめながら、この本を書いたのだと思います。王子さまは言います、『君のすんでるとこの人たちが、おなじ一つの庭で、バラの花を五千も作っているけど、……：：：じぶんたちがなにをほしいのか、わからずにいるんだ。……：：：さがしているものは、たった一つのバラの花のなかにだつて、すこしの水にだつて、あるんだがなあ』

「だけど、目では、なにも見えないよ。心でさがさないかね」

この本は、今、ひもじい思いや、寒い思いをしている、むかし一度は子供だったおとな

たちが、子供だった頃の純粹さを取り戻せるようにと書かれた、おとなのための童話なのです。

確認された方は是非橋本に御一報ください。新宿から松本までのたった三時間の間に日本の最高峰の山が三つも見える、何て素晴らしい路線なんでしょう！

中央本線に乗る時には

橋本 久子

山歩きを始めるようになって、中央本線に乗る機会が随分増えました。二十三日五十分、新宿駅発南小谷行き「急行アルプス」と聞いてただで私たちが山歩きをする者の胸は高鳴ってきます。新宿駅から松本へ向かう車窓から眺める山々を想い浮かべればその理由は分かっていただけだと思いますが……。

車掌さんもいます。それから私は、まだ残念ながらその姿を確認できずにいるのですが、日本で三番目に高い山、奥穂高岳がこの北岳のビューポイントをはんの少しすぎた頃、一瞬だけ見えるのだそうです。(ただし、奥穂高岳が車窓から見える日は一年に教えるほどしかないとのこと。もし、幸運にもその姿を

確認された方は是非橋本に御一報ください。新宿から松本までのたった三時間の間に日本の最高峰の山が三つも見える、何て素晴らしい路線なんでしょう！

天気の良い、空気の澄み切った季節には日本

で一番高い山、言わずと知れた富士山が菲崎を過ぎたあたりから見えます。その孤高な姿に溜め息して、甲府盆地に目をやれば南アルプスの山々がうねうねと連なっています。

小淵沢駅に近づき八ヶ岳が見えてきたら、ちよっと後ろを振り返って見てください。日本で二番目に高い山、雪を頂いた北岳の勇姿が見えるではありませんか。(この北岳のビューポイントを車内放送で教えてくれる親切な

がんセンター研修を終わって

菅野 澄雄



平成二年三月より平成三年四月まで東京築地にある国立がんセンターへ研修にいかせていただきましたのでここで報告記を書かせていただきます。国立がんセンターはその名の通り、がん専門病院として有名ですが、同じ

敷地内に研究所も併設しており臨床と研究が相互にとても良くマッチングしております。例えば手術により得られる貴重な検体を各セクションの研究員が実にスムーズに手にいれることができます。また、逆に研究により得

られたデータをすぐに臨床の場に還元できる
メリットが有ります。私が一番驚いたのは、
一度がんセンター病院を受診した患者さんの
カルテを永久に保存するだけではなく、その
患者さんの生死を一生追跡すると言うこと
です。つまり、ある病気の予後調査が確実に
来ます。

私は国立がんセンター研究所の病理部に籍
を置かせていただきましたが、このヘッド
は下里分類で有名な下里行雄先生で、氏はア
メリカでレジデント生活を送られ、あちらで
のあだなはファイアーボーイと言われるほど
とても仕事に敵しい情熱的なおひとで有られ
ます。慣れない私は先生の前へ行くだけで汗
が吹き出てしどろもどろになりました。そん
な私ですが、時間が経つに従って下里先生の
前でも話ができるようになり、最後の頃では、
非常にかわいがっていたいただきました。さて私
の研究のほうですが、直接指導していただい
たのは第二病室長の向井清先生で有りまし
て、今思うと出来の悪い私を最後まで面倒見
ていただいて本当に感謝しております。何も
かも私には最初の事ばかりで、実験の事から
論文の書き方、図表のレイアウトまで実に親
身に指導していただきました。英語の苦手な
私は向井先生に約二十回程論文を校正してい

いただきました。そんな難産の末出来た論文で
すが、お陰様でラリンゴスコープにアクセプ
トされ、ほっと胸を撫でおろしております。
これも偏に向井先生の御陰だと思っております。
そうこうして居るうちにあつと言う間に一

秋に想う

その日、僕は大学へと車を走らせていた。
生田にある民家園の前で、ただ何となく、車
を止め、本当に何となく立ち寄ることにした。
そう言えば、もう十数年間川崎に住んでいな
がら、ここに来た事はなかった。

民家園のゲートを通り抜け、人影も疎らな
道を歩いていく。僕は何も期待していないし、
頭の中は虚空を漂っている。サクサクいう音
が耳に飛び込む。ふと我にかえると落ち葉
を踏む音だった。『秋だ。』最近、僕は季
節を忘れたように生活していた。『木々が枯
れた葉を惜しげなく落とすように、自分に
って役に立たなくなってきたさまさまの考えを捨
ててしまえるように願っている時、このいら
なくなつたものが、どうしてこんなに美しい
色をしているのだろう』と言うジッドの言葉

年が経ち、辛いと思っていた毎日ですが、今
となつては思い出深い一年でありました。最
後に私に研修の場を与えて下さった、竹山勇
主任教授、菊地原医局長、がんセンターの前
任の先生方に深謝致します。

渡辺昭司



を思い出した。

もう誰も住む事のない古い民家が、そこ
はあった。毛の抜けたみすばらしい犬が一匹
僕に尻尾を振った。

人生は、こんなものなんだ。ささやかな楽
しみを見つけようとする事も、ひよっとした
ら空しい努力なのかもしれない。

さあ、大学へ帰って実験でもしよう。加藤
先生が待っている。



国際オーロロジー会議に出席して

吉野清美

私にとって五年ぶりの日本脱出となった今回の国際オーロロジー会議はスペイン領カナリア諸島で、最も海岸線の美しいと言われるテネリフェ島で一九九〇年十一月十四日から六日間開かれました。そこはスペインと言ってもどちらかというところアフリカ大陸近くに位置し、日本からアンカレッジ経由でマドリッドまで十七時間三十分、そこからさらに三時間を要する常夏のリゾート地です。空港に降り立つと、そこは空も空気も日差しも夏。

学会で用意されたバスの窓からは、まるで砂漠のように続く丘陵地に点々と群生するサボテン、海岸線近くにはオレンジの屋根に白壁の家が時折集落を成しているというような風景が暫く続き、いったいこの島のどこで学会が開けるといふのだろうと思い始めた頃、忽然と木々に囲まれた町プエルトデラクルスが現われてきました。島での滞在は、波しぶきが届きそうな学会会場でもあったホテルの最上階で、テラスからは遙かに続く海岸線と大西洋の力強い大波が黒岩を呑み込んで砕け

散っていく様を眺めることができました。すっかり気分はリゾート、鼻歌まじりで開いたスーツケースの底に潜んでいたものは忘れてはならない発表原稿とスライドでした。そこで気分は急勾配に落下していき、現実へと引き戻されていきました。ここで御紹介が遅れましたが、学会には、今回の旅行において危機に遭遇する度に心配を振るって下さった我が耳鼻咽喉科学教室の竹山主任教授、大橋教授御夫妻、若き医局員とその次に若い私の五人が参加しました。発表当日は予想される質問に対する答を考えながら、会場を覗いたり、イギリス人の先生に録音していただいたテープを聞きながら発音をチェックしたりで少し落ち着かないながらも、食欲だけは落ちず、顔が赤くなるのを気にしながらも学会で用意されたワインを飲みながら、すっかり昼食を食べたその時を迎えたのでした。私たちの群では他に日本人が目に入らなかつたせい、結局で開かれた予演会の時よりずっとリラックスして発表できました。私の演題は蝸電図上

特徴的な波形変化を示すメニエール病における免疫状態に関するもので、発症における免疫異常の関与について考察しました。少し内容が免疫の話に傾いているのに蝸電図の群に入ってしまった為、タイムリーな質問というわけにはいきませんでした。かなりゆっくりと話してくれたので、質問内容も理解でき、語学力の乏しい私も立往生せずすみませんでした。目の上のこぶもとれ、祝杯をあげたせいもあってその夜は引き込まれるように眠りにつきました。

薄々、感づいてはいましたが、スペイン的時間に対する感覚を嫌というほど味合わされたのは、学会企画のスパニッシュナイトと銘打った夕食会のこと、プールサイド、食前酒のシェリー酒を持って席に着き、ワインが配られたまでは順調だったのですが、それからスープが運ばれてくるまでに二時間余りの時間が流れ、食べ終わったのは夜十一時も回ってしまいました。どこがスパニッシュナイトなどと陰口が囁かれる頃になって、仮設舞台でフラメンコが始まりました。もうひとつ私たちがよりスパニッシュになる為にどうしても慣れなければならなかつた事は、レストランのランチタイムがどれも一時三十分からというところ、通常の商店にはシエスタがあり、二時

から四時までは、どの店もシャッターを降ろしてしまふことでした。

旅行中の最大事件は、まずテネリフェを発とうという朝に起こりました。空港まであと三分という所でマイクロバスのタイヤがパンクし、飛行時間が迫っているのにスペイン語しか話せない運転手は作業に手間取り、路上に降りた私たちが必死に手を振っていると、大型トラックがとまってくれて、バスの運転手と何やら話した後、一般乗用車を一台止め、そのトラックに山と荷物を積み入れ、私たちを空港まで乗せてくれたのでした。とにかく親切な人にたくさん出会いました。次はマドリッドから日本へ帰ろうという時、免税店で

サンバの国、ブラジルへ

——国際学会に参加して——

岩 武 博 也



一、はじめに

一九九〇年三月二十一日より二十三日までブラジルのサンパウロで International Scientific Meeting—Prof. George Portmann's Centenary が開催された。この学会はメニエール病の手術で有名なフランスの George Portmann が設立した学会

山ほどおみやげを買込んでしまった後で飛行機が二十四時間遅れだということです。しかも二十四時間後に飛べるという確証もなく、交渉の末、最も早く日本に帰る方法として、ローマに一泊し、翌朝日本へ向けて帰ることになりました。この間も、ホテルが人数分用意されておらず、夜中の二時まで空港で右往左往し、ローマと成田間の航空チケットが、出発間際まで受取れなかったりしながらも、やっとのことで帰ってこれたのでした。二週間の外国旅行で日常生活からリフレッシュされ、またスペインの古き文化と伝統に触れ、思いも新たにこれからも頑張ろうと思いました。

で、一九八四年設立者が九十四才で没後、現在はその息子である Michel Portmann が理事を勤めている。この学会に参加する機会を与えて下さったのは、当教室の非常勤講師であられる石倉先生である。以前、フランスでこの学会が開催された時の御経験からお勧めを戴き、飯田講師と二人で参加を決意し

たのであった。

二、いざ、ブラジルへ！

発表原稿とスライドの準備をなんとか間に合わせ、いよいよ出発の日を迎えた。ヴァリグ航空にて約二十六時間の空の旅が始まる。機内食では定評のあるヴァリグ、成田を離陸後早速、夕食のサービスが始まる。食事が楽しみなのも最初だけ。時差を乗り越え現地時間に少しづつ修正されて行くため、我々の意思は一切無視され、数えて六回、ブローイラーの様にエサを与えられた。出された物は残さず食べる”という親のしつけをこれ程うらめしく思った事はなかった。

三、サンパウロでの悪夢

サンパウロに到着、無事入国手続きをすませたのもつかの間、次に我々を待ち受けていたのは平和で豊かな日本ではとても考えられない出来事であった。ブラジルは年間一七〇〇%とも言われる超インフレ大国。今買ったものが次の瞬間値上がりしているという話がある程だ。ブラジルでは我々の到着する二日前、新大統領が誕生していた。このコロール新大統領が最初に打出した政策というのがインフレ打破：：預金や賃金の強制凍結により通貨流通量を減少させるというものである。そのため我々外国人は銀行や空港でも両替が出

来ず、實際生活を営んでいる現地人でさえ自分のお金も自由にならないといった状況である。それでもなんとか知り合いの日系人に最低限のお金を借りて前途多難な旅が始まった。途方に暮れた空港でとりあえず本場のコーヒーを味わえばとコーヒースタンドに足を止め、一息入れる事にした。さぞかしブラジルのコーヒーはおいしいだろうと誰もが思うであろう。私も例外ではなかった。しかし、飾り気のない白いデミタスカップに並々と入ったコーヒーはまるで墨汁のようで、いつもカップの底がすけて見えるような医局のコーヒーに慣れている私には機内食の後遺症も手伝い、到底飲める代物ではなかった。

四、いよいよ学会へ！

サンパウロではカドーログランドホテルに滞在。我々の想像をはるかに越え、由緒あるかなり洒落たホテルで、前述の如く外に出るにも出られない状況なのでホテル内のレストランで長旅の労をねぎらい今後を互いに励まし合う初日であった。

サンパウロの街は淀んでおり、むっとした大気の中に甘酢っぱくねとついた臭気がただよっていた。ブラジルは広大な土地があるにもかかわらず石油が産出されないため、砂糖きびを原料としたアルコール燃料の車が九〇

%を占めている。クーラーのないタクシーで学会会場であるマクソードプラザホテルへ行くと、そこは外国人宿泊客が多いというだけあって大変モダンなホテルであった。さっそく登録をすませプログラムに目をやると、驚いたことに出席している日本人は我々二人きりである事が判明した。急に不案になり辺りを見回していると、流暢な日本語で話しかけてくる人がいた。彼は「自分は日系三世で名前は村中順治。以前金沢大学に留学した経験が有り、その時日本人に大変親切にもらったので今度は自分が日本人をエスコートしたい」と自己紹介してくれた。ポルトガル語をろくに話せない我々は彼の好意に甘えることとして、学会の初日を無事に終える事が出来た。

彼と別れ、ロビーに上がり一息ついていると突然見知らぬ人に「ようこそ日本から来てくれました（恐らくポルトガル語でこんな事を言っていたと思う）」と握手を求められた。いったい誰だろうと首をかしげながらとりあえずホテルに帰った。翌日は村中先生の上司であるサンパウロ大学の Prof. Ossamu Butigan とランチを共にし、ブラジルでの耳鼻咽喉科診療について色々と貴重な話を伺う事が出来た。その後、学会会長に紹介して

もらうと、なんと昨日我々に握手を求めて来た「見知らぬ人」が会長の Dr. Alexandre Medeiros であった。しかも幸運は重なるも……わざわざ Prof. Michel Portmann と一緒に記念写真を撮る機会までも与えて下さった。午後のセクションで飯田講師と私は無事に発表を終え、サンパウロ最後の夜は村中先生の案内で「見なけりゃ損」のサンバショーを楽しんだ。おりしもブラジルでは「カーニ」が開催されており世界各国の人々がサンバのリズムに酔いしれている中、飯田講師は日本を代表して自慢のノド?!をうならせた。（楽曲..上を向いて歩こう）

五、イグアス、そしてリオへ
学会も無事終了、今回、私が観光として最も楽しみにしていたイグアスへと向う。世界最大規模であるイグアスの滝は鼓膜を揺さぶる大音響で八五mの高さから万物に覆いかぶさるように落ちてくる。目の前で繰り広げられる大自然のショーに思わず足がすくむ。言い古された言葉だが、自分は何とちっけけな存在なのだろうと真剣に考え込まずにはいられなかった。そしてイグアスの夜は遙か遠くから聞えて来る滝の音を聞きながら満天の星空を眺めて慌ただしかった学会の疲れをいやすが如くゆっくりと更けて行った。

旅のしめくりはリオデジャネイロ……：
名物シュラスコ（何種類もの串刺しの肉を炭
火で焼いて目の前の皿の上で好きな量だけ切
ってくれる）を思う存分食べ、コパカバーナ
の海岸で日光浴をしながらやがて地球の裏側
に在るちっぽけな国へ帰ったら、また耳垢を
取らなくてはいけないのかと押し寄せる現実
を蹴り上げた。

五、おわりに

やっと十二時間の時差を克服したかと思っ
たらもう帰国……。行きの飛行機では食べ過
ぎてむねやけを起こし、また思いもよらない
金融政策のおかげで結局予定の二倍近くの滞
在費を支払い、今考えても自分は逆境に強い
のであろうかと感心する。Prof. Butugan,
村中先生をはじめ現地の人々の心温まるもて
なしや数多くの手助けに支えられ初めての国
際学会を多方面から満喫することができた。
たぶんこの先たくさんの同志がさまざま
土地で国際学会を経験すると思うが、短い滞
在期間の中でその国の生れたばかりの混沌と
した政局までも垣間見たのは、恐らく我々が
最初で最後であろう。……と、願いたい。

バラニー学会前後

岡田智幸

去る一九九〇年にバラニー学会が東京プリ
ンスホテルで開催されました。小生は初めて
の国際学会の演題参加でしたが、演題申し込
みからどうやっていいのか、また届くのか、
発表できるのか、ちょうど初恋の時のようで、
何かそわそわ。竹山主任教授にお聞きしても、
加藤教授にお聞きしても「大丈夫だ」とのご
返答。

さてさて、演題採用のはこびとなり、これ
は困った、時間もないけど……。小生は当
時、関連教育病院である稲城市立病院に向向
しておりまして、普段の不摂生のせいとか、ど
こに写真やスライドがあったか忘れてしまっ
てんやわんや。やっとの思いで捜し当てま
した埃まみれのスライドを。これで発表でき
ると思ったのも束の間、パネルセッションで
あったことに気付きました。診療時間を終わ
ってから市立病院の廊下に巻き尺で計って線
を引き、A三判、B四判、A四判の紙をおい
てこれといけると頭を上げた途端、患者さん
の人ばかり、なんだかんだでパネル七枚が仕

上がったのは一週間前でした。
発表の段になり、いざパネルの前に立つと
両足はガクガク、全身がふるえ、冷や汗が出
て、ワイシャツからズボンまでピチャと体
くっついて正に身動きできない状態でした。
質問された外国の先生には何と答えたのか記
憶にない始末。

総括質問では、座長があ有名な Dr.
Cohen で質問していただいたのは、Prof.
Fuchs でした。後で用意していた回答をす
ればよかったとわかったのですが (Prof.
Fuchs となんとか話か通じて)、当時は胃
が煮え滾るようでありまして I am tinpu-
nkanpun でした。

今年、記念すべき第五十回日本平衡神経
科学会が本学の竹山主任教授のもとで開催さ
れ、Prof. Fuchs が講演発表される予定
ですので、小生としても名誉挽回をと、思っ
ている今日この頃です。

平成3年度新入局員自己紹介

勝見直樹

今春、第八十四回医師国家試験に合格し聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科に入局しました。勝見直樹です。簡単ではありますが自己紹介をさせていただきます。

昭和三十八年五月、新潟市にて生まれました。竹山勇教授と同じ新潟出身であります。

新潟高校を卒業し一年後に当大学に入學いたしました。入学後、今まで経験した事の無いスポーツを始めようと思いアイスホッケー部に入りました。しかし練習が夜中であるため、特に体力に自信の無い私は翌日の授業に支障を来し、二度目の一年生の途中にて休学いたしました。以後学業に専念するつもりでしたが、ラリーに興味をひかれ自動車に時間とお金を費やすようになってしまいました。

その後は順調に卒業まで至りましたが、再び一年間寄り道をして当科入局となりました。この様に通常よりも時間をかけて医師とな

った私ですが、今後は二年間という研修期間中に聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科教室の一員として恥じない医師になるように努力したいと思います。

今後とも御指導、御鞭撻の程、宜しく御願ひ申し上げます、自己紹介とさせていただきます。

宮部 聡

本年六月に聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科教室に入局し、四ヶ月がたとうとしています。四月の国家試験の緊張が、かなり昔の事のように感じられる今日この頃です。外来、病棟、手術と日々新しい経験の連続で、試験とは全く異なった緊張感を味わっています。自己紹介を簡単にさせていただきたいと思

います。父親は耳鼻咽喉科医で、私は長男として生まれ、三歳頃より、大学病院の目と鼻の先の生田という所で、二十数年間育ちました。私自身、大学創設当時より幼いながら、大学の存在を意識し、身近に感じていました。

学生時代、何か運動部に入りたかったので、準硬式野球部で汗を流し、東医体でベストエイトまで行けた事がよい思い出です。先日、ソフトボール大会があり、「野球は、やはり団体スポーツだなあ。」とみなさんを納得させてしまいました。特技、取り柄はこれと言ってありませんが、あえて言うならば、まじめだけが取り柄かと、かつてに思っています。

先輩方の仕事のペースに追いつけず、とまどっています。毎日一個ずつでも新しい事を吸収し、同じ誤ちを繰り返さない事が大切ではないかと思っています。研修医の期間は、分野を問わず、先輩から多くを学びたいと思います。

諸先輩方、今後とも宜しく御指導御鞭撻の程御願ひ申し上げます。簡単ですが、自己紹介とさせていただきます。

小松崎 靖

昭和三十九年六月二十四日秋田県横手市に生まれる。

以後十年間、私の人格はこの地で形成された。今でも秋田弁を話すことに異和感はない。昭和四十九年十二月、栃木県宇都宮市に転

居。環境が変わった云々よりもクラスの女の子の質が下がったことのショックが大きかった。

小学校時代は水泳部に所属、夏中毎日ゲロを吐くまで泳がされたことを今だに夢に見る。

中学校時代は弓道に没頭。そして栃木県立宇都宮高等学校入学後は、柔道を始めることとなる。当時これが将来の敷石になろうとは知る由もなし。昭和五十八年三月、高校卒業するも自堕落な生活から代ゼミ、河合塾と大手予備校を点々とし、落ち着く先は聖マリヤンナ医大でありました。入試面接官の一人が竹山教授でありましたことも、また奇偶でございませぬ。

学生時代は小田急線東北沢駅徒歩約七分の井の頭通り沿いの家賃月二万七千円のボロアパートで生活していた。友人には「聖マリヤというイメージにそぐわない」といわれ続ける。

入学当初より経験者ということで、美辞麗句、半ば強迫じみた諸先輩方の勧誘で柔道部へ所属することとなったが、総大将がまたもや竹山教授でありましたことも、これまた奇偶でございました。

いつの間にかやら時が過ち、強迫する側へ自分が回ってしまったことに気づくとはや卒業であった。

学生時代より腫瘍学に興味があり、外科的なことへのあこがれがあったことなど、耳鼻咽喉科を志すことに躊躇はありませんでした。卒業後、かねてより交際中でありました大学の同級生との祝儀の御媒酌を竹山教授御夫妻に心良くお引受け頂き、凶々しくも家庭を背負うこととなりました。

六月の入局後は諸先生方に基本的なことを様々御教示頂き、最近ようやく足元が地についてきたことを実感しております。誠に感謝の念にたえません。

以後当科の益々の発展に微力ながら、助力できます様努力して参る所存でございます。よろしくお願い致します。



平成二年度教室業績集

著 書

番号	氏 名	著書・誌上・ 学会発表名	巻 号 頁	発表西暦 年 次	研 究 題 目
1	○竹山 勇	耳鼻咽喉科救急 療法ハンドブック (南江堂)	P. 1~3	1990. 6	耳鼻咽喉科救急疾患の特殊性
2	○菊地原基敬	耳鼻咽喉科救急 療法ハンドブック (南江堂)	P. 88~89	1990. 6	鼻 1. 出血
3	○飯田 順	耳鼻咽喉科救急 療法ハンドブック (南江堂)	P. 176~ 180	1990. 6	救急医療に必要な器具・薬剤

誌 上 発 表

1	○I. Kato K. Uesugi M. Kikuchihara H. Iwasawa J. Iida K. Tsutsumi H. Iwatake I. Takeyama	The Journal of Laryngology and Otology	Vol. 104 P. 322~ 325	1990. 4	Tracheostomy-The horizontal tracheal incision
2	○加藤 功 岩澤 寛 中島 久美 高橋 馨子 吉野 清美 岡田 智幸 渡辺 昭司 竹山 勇	聖マリアンナ 医科大学雑誌	vol. 18(2) P. 113~ 119	1990. 4	メニエール病の手術療法
3	○石倉 幹雄 鳥越 達也 甲斐 園子 漆畑 保 竹山 勇	日本扁桃研究会 会誌	vol. 29 P. 35~41	1990. 5	扁桃の免疫学的研究 -血清補体と陰窩の象形複成 術について-
4	○鳥越 達也 漆畑 保 石倉 幹雄 竹山 勇	日本扁桃研究会 会誌	vol. 29 P. 54~59	1990. 5	扁桃組織内における濾胞樹状 細胞の免疫組織学的二重染色 法による検討 -特に組織球との関係に ついて-
5	○I. Kato *J. Watanabe *T. Nakamura *K. Harada *T. Hasegawa *R. Kanayama (*山形大)	Brain	vol. 113 P. 921~ 935	1990. 6	Mapping of Brainstem Lesions by the Combined Use of Tests of Visually- Induced Eye Movements
6	○佐久間 惇	日本耳鼻咽喉科 学会会報	vol. 93 P. 779~ 785	1990. 6	後半規管神経刺激によりネコ 大脳皮質十字陥凹に発生する 細胞外電場電位
7	⊕針谷 明美 *小口 和久 *真鍋 雄一 *瀧野 貢 *太根 節直 飯田 順 (*眼科)	眼科	vol. 32 No. 7 P. 727~ 730	1990. 7	急激な視力低下にて発症した 蝶形骨洞 Pyocoele の 1 例
8	○菊地原基敬	聖マリアンナ 医科大学雑誌	vol. 18(4) P. 196~ 207	1990. 8	担癌宿主における acute phase reactant の動態に関 する研究 -血漿 alpha-1-antitrypsin を中心とした考察-

番号	氏名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年次	研究題目
9	○高橋 馨子	聖マリアンナ医科大学雑誌	vol.18(4) P.208~ 217	1990.8	末梢性顔面神経麻痺の予後判定 -多変量解析を用いた予後因子の検討-
10	○中島 久美	聖マリアンナ医科大学雑誌	vol.18(4) P.218~ 225	1990.8	突発性難聴の治療に関する臨床的考察 -各治療成績における比較検討-
11	○竹山 勇 渡来 潤次 上杉 恵介 他66名	耳鼻咽喉科展望	vol.33 補冊4 P.543~ 565	1990.8	通年性アレルギー性鼻炎に対するフルル酸エメダスチン(KG-2413)の臨床評価 -二重盲検群間比較試験-
12	⊗Y.Uchino ※N.Isu A.Sakuma △T.Ichikawa *K.Hiranuma (*東京医大) (※福井大) (△杏林大)	Experimental Brain Research	vol.82 P.14~24	1990.9	Axonal trajectories of inhibitory vestibulocollic neurons activated by the anterior semicircular canal nerve and their synaptic effects on neck motoneurons in the cat
13	○岩澤 寛 加藤 功 高橋 馨子 渡辺 昭司 荻野 貞雄 竹山 勇	日本耳鼻咽喉科学会会報	vol.93 P.1573	1990.10	Open loop conditionにおける追跡眼球運動
14	⊗N.Isu A.Sakuma ※K.Hiranuma △T.Ichikawa ◇Y.Uchino (*福井大工学部) (※東京医大精神科) (△杏林大第1生理) (◇東京医大第2生理)	Neuroscience Letters	vol.119 P.163~ 166	1990.11	Localization and Synaptic Effects of Inhibitory Vestibulocollic Neurons Activated by the Posterior Semicircular Canal Nerve in the Cat
15	○上杉 恵介 加藤 功 堤 康一朗 岩武 博也 菊地原基敬 岩澤 寛 飯田 順 竹山 勇	日本気管食道科学会会報	vol.41(6) P.465~ 470	1990.12	当科における気管切開術の一工夫 -簡単に迅速な方法-
16	○竹山 勇 渡来 潤次 坂本 園子 上杉 恵介 他70名	耳鼻咽喉科展望	vol.33 補冊6 P.773~ 791	1990.12	通年性アレルギー性鼻炎に対するKetotifen-MRの臨床的検討 -多施設二重盲検法によるKetotifenカプセルとの比較-
17	○加藤 功 佐藤 成樹 渡辺 昭司 岡田 智幸	Pharma Medica	vol.9(11) P.11~15	1991.2	めまいの発生機序・前庭系の解剖・生理
18	○竹山 勇 上杉 恵介 他63名	耳鼻咽喉科展望	vol.34 補冊1	1991.2	スギ花粉症に対するアンレキサノクスの季節前・中投与による予防および治療効果について -プラセボとの二重盲検群間比較試験-
19	○I.Akao *Y.Sato *K.Mukai *H.Uhara *S.Furuya T.Hosikawa *Y.Shimosato	Laryngoscope	vol.101 P.279~ 283	1991.3	Detection of Epstein-Barr Virus DNA in Formalin-Fixed Paraffin-Embedded Tissue of Nasopharyngeal Carcinoma Using Polymerase Chain Reaction and In Situ Hybridization

番号	氏名	著書・誌上・ 学会発表名	巻号頁	発表西暦 年次	研究題目
	I. Takeyama (* 国立がんセンター)				
20	○ K. Uesugi I. Kato M. Kikuchihara H. Iwasawa J. Iida K. Tsutsumi H. Iwatake I. Takeyama	RECENT ADVANCES IN BRONCHOSOPHAGOGY	P. 405~ 406	1990.	Tracheotomy - A Simple And Fast Method
21	○ H. Iwatake J. Iida M. Kikuchihara K. Nakajima K. Tsutsumi S. Minami I. Kato I. Takeyama	RECENT ADVANCES IN BRONCHOSOPHAGOGY	P. 451~ 452	1990.	A Statistical Review of Patients with Foreign Bodies In the Airway and Esophagus
22	○ 矢崎 裕久 五十嵐 淑晴 加藤 功 竹山 勇	Ear Research Japan	vol. 21 P. 111~ 112	1990.	マウス内リンパ嚢の微細構造
23	⊕ 宇原 久 * 向井 清 * 佐藤 雄一 赤尾 一郎 * 古屋周一郎 (* 国立がんセンター)	実験医学	vol. 18(9) P. 84~88	1990.	ホルマリン固定組織からの ウイルスの検出

学会発表

1	○ 佐久間 惇 * 井須 尚紀 ※ 市川 利信 ※ 渡辺 士郎 △ 内野 善生 (* 福井大学工学部) (※ 杏林大第1生理) (△ 東京医大第2生理)	第67回日本生理 学会大会		1990. 4	前庭視床ニューロンの性質
2	○ 竹山 勇	第91回日本耳鼻 咽喉科学会総会		1990. 5	推薦講演：発癌へのホルモ ンとウイルスの関与
3	○ 飯田 順 中島 久美 堤 康一朗 岩武 博也 南 定 竹山 勇	第91回日本耳鼻 咽喉科学会総会		1990. 5	一側性声帯麻痺に対する経 皮的シリコン注入術
4	○ 鳥越 達也 漆畑 保 石倉 幹雄 竹山 勇	第91回日本耳鼻 咽喉科学会総会		1990. 5	細胞培養法を用いた扁桃組 織内における貧食細胞及び 免疫担当細胞の検討
5	○ 赤尾 一郎 星川 智英 竹山 勇 * 小野 勇 * 向井 清 * 海老原 敏 (* 国立がんセンター)	第91回日本耳鼻 咽喉科学会総会		1990. 5	上咽頭癌における Epstein- Barr virus の関与とその臨 床病理学的意義
6	○ 佐久間 惇 竹山 勇 * 内野 善生 ※ 井須 尚紀 (* 東京医大第2生理) (※ 福井大工学部)	第91回日本耳鼻 咽喉科学会総会		1990. 5	後半規管刺激により大脳後 十字陥凹に発生する電場電位

番号	氏名	著書・誌上・ 学会発表名	巻号頁	発表西暦 年次	研究題目
7	○岩澤 寛 加藤 功 高橋 馨子 渡辺 昭司 荻野 貞雄 竹山 勇 *宮沢 達 (* 第1内科)	第91回日本耳鼻 咽喉科学会総会		1990.5	Open Loop conditionに おける追跡眼球運動
8	○ I. Kato I. Takeyama * J. Watanabe * T. Nakamura * K. Harada * Y. Hasegawa * R. Kanayama (* 山形大耳鼻科)	第16回 国際バラニー学会		1990.5	EOG findings in patients with lesions in cerebellar peduncles
9	○ T. Okada I. Kato S. Sato S. Watanabe I. Takeyama	第16回 国際バラニー学会		1990.5	Retinal Ganglion Cells Projecting to the Nucleus of Optic Tract in the Rat
10	⊗ N. Isu A. Sakuma ※ M. Kitahara ※ Y. Uchino I. Takeyama (* 福井大工学部) (※ 東京医大第2生理)	第16回 国際バラニー学会		1990.5	Vestibulo- Thalamic Neurons Give Off Descending Axons to the Spinal Cord
11	⊗ T. Hasegawa * K. Harada * I. Igarasi * M. Yoshida * Y. Koike I. Kato (* 山形大耳鼻科)	第16回 国際バラニー学会		1990.5	Effect of uvulonodular lesions on optokinetic nystagmus and optokinetic after- nystagmus in cats
12	⊗ R. Kanayama * T. Nakamura * M. Ohki * Y. Kimura * Y. Koike I. Kato (* 山形大耳鼻科)	第16回 国際バラニー学会		1990.5	Visually induced eye movements in Wallenberg's syndrome
13	○ I. Kato	第16回 国際バラニー学会 サテライト シンポジウム		1990.5	Mapping of brainstem lesions by combined use of visually induced eye movements
14	○荻野 貞雄 加藤 功 高橋 馨子 渡辺 昭司 竹山 勇	第72回日本耳鼻 咽喉科学会 神奈川県地方会		1990.6	中心暗点の視性眼運動に対 する役割について
15	○鈴木 毅 渡辺 昭司 岩武 博也 加藤 功 竹山 勇 *小池 満 ※竹内 英子 ※田所 衛 (* 第一内科) (※ 第一病理)	第72回日本耳鼻 咽喉科学会 神奈川県地方会		1990.6	頸部 Germcell tumor の 一症例
16	○菊地原基敬 堤 康一郎 倉田 文雄 大川 勇 竹山 勇	第14回日本頭頸 部腫瘍学会		1990.6	舌扁平上皮癌症例に対する Neo-adjuvant chemotherapy の組織学的 効果
17	○大川 勇 菊地原基敬 堤 康一郎 飯田 順 竹山 勇	第14回日本頭頸 部腫瘍学会		1990.6	頭頸部における重複癌症例 の検討

番号	氏名	著書・誌上・ 学会発表名	巻号頁	発表西暦 年次	研究題目
18	○倉田 文雄 菊地原基敬 大川 勇 竹山 勇	第73回日本耳鼻 咽喉科学会神奈 川県地方部会		1990.9	下咽頭摘出後の遊離空腸の 再建について
19	○鈴木由香里 飯田 順 鳥越 達也 大川 勇 竹山 勇 *田所 衛 (* 第一病理)	第73回日本耳鼻 咽喉科学会神奈 川県地方部会		1990.9	再発性難治性咽頭腫瘍の 一症例
20	○大橋 徹 越智健太郎 佐藤 成樹 荻野 貞雄	第73回日本耳鼻 咽喉科学会神奈 川県地方部会		1990.9	オーゾグラムで scale out を示した症例の蝸電図
21	○朝倉 美弥 岩澤 寛 渡辺 昭司 橋本 久子 靱持 睦 菅野 澄雄 竹山 勇	第73回日本耳鼻 咽喉科学会神奈 川県地方部会		1990.9	SLEによる one and a half 症候群の一症例
22	○中島 博昭	第73回日本耳鼻 咽喉科学会神奈 川県地方部会		1990.9	シンポジウム：咽頭疾患に ついて
23	○鳥越 達也 漆畑 保 石倉 幹雄 竹山 勇	第3回日本口腔・ 咽頭科学会		1990.9	扁桃組織における抗原食 後のマクロファージの分布
24	○矢崎 裕久 竹山 勇 *秋元 義弘 *平野 寛 (* 杏林大第2解剖)	第22回日本電子 顕微鏡学会		1990.9	実験的滲出性中耳炎におけ る耳管中耳粘膜の微細構造 の変化
25	○橋本 久子 鈴木 正彦 南 定 岩武 博也 加藤 功 竹山 勇	第29回 日本鼻科学会		1990.9	鼻中隔膿瘍の4症例
26	○甲斐 園子 漆畑 保 竹山 勇	第29回 日本鼻科学会		1990.9	鼻粘膜組織内のステロイド 親和性部位
27	○中島 博昭 菊地原基敬 岩澤 寛 大川 勇 三保 仁 竹山 勇	第42回日本気管 食道科学会		1990.9	喉頭原発と思われた Adenoid cystic carcinoma の一例
28	○岩武 博也 加藤 功 飯田 順 南 定 木原 紀子 竹山 勇	第42回日本気管 食道科学会		1990.9	挿管後に発生した気管狭窄 の一症例
29	○I. Takeyama	第20回国際オー ジロジー学会		1990.10	Problems in the clinical application of summating potential (SP)
30	○T. Ohashi K. Ochi I. Takeyama	第20回国際オー ジロジー学会		1990.10	Electrocochleographic findings in Monkeys immunized with type II collagen
31	○K. Yoshino T. Ohashi T. Urushibata I. Takeyama	第20回国際オー ジロジー学会		1990.10	Immune status in cases of Meniere's disease presenting negative SP dominance

番号	氏名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年次	研究題目
32	○K. Ochi T. Ohashi I. Takeyama	第20回国際オー ジオロジー学会		1990. 10	Electrochocleographic changes in Guinea Pigs immunized with type II collagen using the chronically implanted round window electrode
33	○釘持 睦 越智健太郎 木下 裕継 大橋 徹 竹山 勇	第35回 日本聴覚医学会		1990. 11	ブロム酸ナトリウム投与後 の家兔の蝸電図変化
34	○木下 裕継 釘持 睦 越智健太郎 大橋 徹 竹山 勇	第35回 日本聴覚医学会		1990. 11	モルモットにおける慢性 電極法の一工夫 -簡便法について-
35	○吉野 清美 漆畑 保 大橋 徹 巖 文雄 竹山 勇 *永井 裕 (* 東京医歯大)	第35回 日本聴覚医学会		1990. 11	メニエール病症例における 血清Ⅱ型Collagen抗体及び 免疫複合体の測定
36	○漆畑 保 巖 文雄 竹山 勇 *高橋 裕一 (* 山形県衛生研究所)	第40回日本アレ ルギー学会総会		1990. 11	スギ花粉外壁破裂の有無と アレルギー性について
37	○中島 久美 加藤 功 高橋 馨子 岩武 博也 鈴木由香里 竹山 勇	第18回日本臨床 耳科学会		1990. 11	当科における慢性中耳炎 手術症例の検討
38	○飯田 順	第32回神奈川医 学会学術大会・ 分科会		1990. 11	反回神経麻痺の病態と治療 について
39	○高橋 馨子 渡辺 昭司 加藤 功 竹山 勇 *米山 公啓 (* 第2内科)	第49回日本平衡 神経科学会		1990. 11	Joseph病家系のENG所見
40	○佐藤 成樹 加藤 功 渡辺 昭司 竹山 勇	第49回日本平衡 神経科学会		1990. 11	橋核の視性眼運動に対する 役割
41	○岩澤 寛 加藤 功 高橋 馨子 渡辺 昭司 竹山 勇	第49回日本平衡 神経科学会		1990. 11	光ファイバー式超低雑音 ENGシステム
42	○荻野 貞雄 加藤 功 高橋 馨子 渡辺 昭司 竹山 勇	第49回日本平衡 神経科学会		1990. 11	視性眼球運動における中心 暗点の影響について
43	○渡辺 昭司 加藤 功 佐藤 成樹 岡田 智幸 竹山 勇	第49回日本平衡 神経科学会		1990. 11	視運動性眼振の皮質下経路 について
44	○佐久間 惇 竹山 勇 *井須 尚紀 ※市川 利信 △平沼 建 ◎内野 善生 (* 福井大学工学部) (※ 杏林大第1生理) (△ 東京医大精神科) (◎ 東京医大第2生理)	第49回日本平衡 神経科学会		1990. 11	前半規管系抑制性前庭頸細胞の性質

番号	氏名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年次	研究題目
45	Ⓞ奥山 孝 *木村 洋 *中村 正 *金山 亮治 *原田 浩二 *小池 吉郎 加藤 功 (* 山形大耳鼻科)	大49回日本平衡 神経科学会		1990.11	多彩な眼球運動障害を伴った脳底動脈瘤の一例
46	Ⓞ中村 正 *渡辺 仁 *木村 洋 *小池 吉郎 加藤 功 (* 山形大耳鼻科)	第49回日本平衡 神経科学会		1990.11	小脳脚障害における眼運動所見について
47	○岩武 博也 飯田 順 中島 久美 堤 康一郎 竹山 勇	第19回聖マリア ンナ医学会		1990.12	ビデオ演題：一側性声帯麻痺に対するシリコン注入術－経皮的アプローチを中心に
48	○大川 勇 加藤 功 飯田 順 菊地原基敬 岩武 博也 竹山 勇 *鈴木 八郎 (* 山形県中央病院耳鼻科)	第19回聖マリア ンナ医学会		1990.12	ビデオ演題：気管に浸潤した甲状腺癌の気管端々吻合術
49	○菊地原基敬	第19回聖マリア ンナ医学会		1990.12	シンポジウム：頭頸部癌の治療について－舌癌を中心に－
50	○高橋 馨子 加藤 功 岩澤 寛 渡辺 昭司 荻野 貞雄 竹山 勇	第74回日本耳鼻 咽喉科学会神奈 川県地方部会		1990.12	光ファイバーによる眼球運動の記録
51	○鈴木由香里 菊地原基敬 中島 久美 木下 裕継 竹山 勇	第74回日本耳鼻 咽喉科学会神奈 川県地方部会		1990.12	頸部蜂窩織炎を併発した甲状腺腫瘍の一症例
52	○菊地原基敬 竹山 勇 赤尾 一郎 大川 勇	第1回日本頭頸 部外科学会		1991.1	腫瘍マーカーとしての α_1 -アンチトリプシンの意義
53	○竹山 勇	川崎耳鼻咽喉科 医会 25周年講演会		1991.1	臨床鎖談－よりよき診療をめざして
54	○矢崎 裕久 竹山 勇 *秋元 義弘 *平野 寛 (* 杏林大第2解剖)	第38回日本基礎 耳科学会		1991.2	実験的滲出中耳炎における耳管中耳粘膜の微細構造の変化
55	○上杉 恵介 飯田 順 菊地原基敬 竹山 勇 *江沢 暁彦 (* 横須賀市)	第75回日本耳鼻 咽喉科学会神奈 川県地方部会		1991.3	鼻中隔多形腺腫の一症例
56	○岡田 智幸 菊地原基敬 飯田 順 荻野 貞雄 赤城 光代 加藤 功 竹山 勇	第75回日本耳鼻 咽喉科学会神奈 川県地方部会		1991.3	非定型の聴力像を呈した聴神経腫瘍症例
57	○中島 久美	第75回日本耳鼻 咽喉科学会神奈 川県地方部会		1991.3	シンポジウム：難治性滲出性中耳炎の検討

番号	氏名	著書・誌上・学会発表名	巻号頁	発表西暦年次	研究題目
58	○竹山 勇	川崎市医師会		1991.3	講演：乳幼児検診に必要な耳鼻咽喉科の知識
59	○飯田 順 中島 久美 岩武 博也 星川 智英 竹山 勇	第3回 日本喉頭科学会		1991.3	一側性声帯麻痺に対する経皮的シリコン注入術
60	○上杉 恵介 漆畑 保 巖 文雄 竹山 勇 *高橋 裕一 (*山形県衛生研究所)	第9回 日本耳鼻咽喉科 免疫アレルギー 学会		1991.3	スギ花粉外壁裂開の有無とアレルギー性について
61	○漆畑 保 甲斐 園子 橋本 久子 吉野 清美 上杉 恵介 鳥越 達也 竹山 勇	第9回 日本耳鼻咽喉科 免疫アレルギー 学会		1991.3	鼻アレルギー粘膜組織におけるステロイド標的部位の検討
62	○鳥越 達也 漆畑 保 石倉 幹雄 竹山 勇	第9回 日本耳鼻咽喉科 免疫アレルギー 学会		1991.3	免疫組織学的方法を用いた扁桃内リンパ小節の成熟度についての検討
63	○吉野 清美 漆畑 保 巖 文雄 大橋 徹 竹山 勇	第9回 日本耳鼻咽喉科 免疫アレルギー 学会		1991.3	メニエール病における血清抗Ⅱ型コラーゲン抗体及び免疫複合体

外来担当表（平成4年1月現在）

		月	火	水	木	金	土
午	初診①	加藤	吉野	竹山 中島(博)	菊地原	中島(久)	岡田
	初診②	上杉	赤尾	吉野	鈴木(正)	上杉	鳥越
	再来	菊地原 星川	岡田 鳥越	中島(久) 釧持	鳥越 赤尾	鈴木(正) 星川	中島(博) 釧持
	再来 検討				竹山		
前	特殊 外来		めまい		喉頭	めまい	頭頸部
			中島(博) 荻野		岩武 星川 飯田	加藤 高橋 渡辺	菊地原 鈴木(正) 赤尾 田沢

午 後	特殊	聴覚	内視鏡	アレルギー 扁桃	蝸電図	めまい	
		中島(久) 赤城 朝倉	菊地原 赤尾	上杉 鳥越 三保	大橋 吉野	加藤 岡田 釧持	

医局構成員住所録

氏名 住所 電話

△主任教授▽

竹山 勇

〒194 東京都町田市つくし野二一〇一三二
〇四二七(九六)五四一三

△教授▽

加藤 功

〒216 川崎市宮前区宮前平一〇九二七
ニューウェルテラスC一三〇六号
〇四四(八八八)二二三八

大橋 徹

〒154 東京都世田谷区野沢三二一八
東豊エステート一三〇二号
〇三(三四一〇)二六五二

〒305 茨城県つくば市大角豆九四九一〇
〇二九八(五八)一三五〇

△客員教授▽

猪 初男

〒152 東京都目黒区大岡山二一四一三
〇三(三七七)四二二二

△講師▽

飯田 順

〒214 川崎市多摩区宿河原四一六一五二〇二号
〇四四(九三二)四八二〇

氏名 住所 電話

漆 烟保

〒216 川崎市宮前区馬絹一七六七七二〇二号
〇四四(八五三)二八八六

岩 沢 寛

〒158 東京都世田谷区中町四一三七一七三〇五
〇三(三七〇四)五一七八

菊地原 基敬

〒215 川崎市麻生区王禅寺五〇七一七三
〇四四(九八八)九八二五

中 島 久美

〒182 東京都調布市多摩川一四七七一
ライオンズガーデン調布第二五〇五号
〇四二四(八五)九三七〇

△助手▽

吉野 清美

〒225 横浜市緑区美しが丘五一一八一二
コーポ山中第一三〇一号
〇四五(九〇一)六八七五

高 橋 馨子

〒225 横浜市緑区市ケ尾町四九五一七
〇四五(九七二)一一六四

堤 康一郎

〒164 東京都中野区本町二一四二一五
〇三(三三七一)一一一〇

23 Poplar-Ave. St. John's Newfoundland
ALB 1C7, Canada.
七〇九(七五四)三九二二

(平成二年四月〜平成四年四月までカナダメモリアル大学留学中)

中

〒113 博昭

川崎市高津区末長四六一
梶が谷プラザビル一〇〇九号
〇四四(八七七)四〇一九

橋

〒本久子

〒235 横浜市磯子区洋光台四一二三一二三
〇四五(八三一)二二二二

岩

〒武博也

横浜市緑区美しが丘西二一五四一一二
プラザ美しが丘二〇二
〇四五(九〇一)三三八六

上

〒杉恵介

〒216 川崎市宮前区犬蔵二一八一二七
ドムスタマプラーザ三〇五号
〇四四(九七五)〇〇一三

越

〒智健太郎

〒225 横浜市緑区元石川町六三〇〇一六〇二二
〇四五(九〇一)三五〇二

大

〒川勇

〒162 東京都新宿区山吹町三三一(小川泰正方)
〇三(三二六八)六三一八

岡

〒田智幸

〒113 東京都文京区本郷五二一五
〇三(三八一一)五二二六

佐

〒藤成樹

〒225 横浜市緑区あざみ野四一三六一二
ファミリー田園二一四〇三三
〇四五(九〇三)四一〇七

鈴

〒木正彦

〒225 横浜市緑区荏田南三一六一二八
〇四五(九四一)九三四六

南

〒定

〒288 銚子市松本町一〇九八七
メゾン太田屋三〇三三
〇四七九(二三)三九二二

佐久間

〒惇

〒215 川崎市麻生区百合ヶ丘三一二七一一七
サンライズ百合ヶ丘一〇二二
〇四四(九五三)〇八八九

△病院助手

赤尾

〒尾一郎

〒225 横浜市緑区荏田町三二二二二
グリーンハイツあざみ野三〇五号
〇四五(九一二)一六五三

荻

〒野貞雄

〒214 川崎市宮前区南生田五一四一八一三〇三
〇四四(九七六)四〇四一

菅

〒野澄雄

〒214 川崎市多摩区中野島一〇四八一
新多摩川ハイム五一三一
〇四四(九四五)三五二七

田

〒卓

〒225 横浜市緑区新石川四一三七一一六
アルカディア飯島二〇二
〇四五(九一一)四八五八

鳥

〒越達也

〒213 川崎市高津区溝ノ口六七四
○四四(八一)一四八六

渡

〒辺昭司

〒214 川崎市多摩区登戸二二五六
三島園四〇五号
○四四(九三三)八五四一

赤

〒城光代

〒225 横浜市緑区あざみ野四一六一二
テラスボナルA号
○四五(九〇二)七〇五九

宮

〒坂良介

〒362 埼玉県上尾市谷津二一〇一
ソフィア上尾B一五二三
○四八(七七二)八五七七

劔

〒持睦

〒214 川崎市多摩区登戸新町一九四
ベルクハウス「Area」一〇三
○四四(九三四)四六九四

三

〒井雅夫

〒216 川崎市宮前区潮見台八一二八
潮見台ハイツ
○四四(九七五)〇八八一

朝

〒倉美弥

〒242 大和市下鶴間二五七〇一
ダイヤパレス鶴間八〇三号
○四六二(七七)二五八九

倉

〒田文雄

〒238 横須賀市緑が丘二六
○四六八(二二)六二九四

三

〒保仁

〒288 銚子市竹町一六〇五二二
ライトパレス内浜一〇二
○四七九(二二)九二六四

△大学院生▽

星川智英

〒223 横浜市港北区新吉田町一一四九一二
○四五(五三一)二二八五

木

〒下裕継

〒960 福島市仲間町四一五
ライオンズマンション老番館一〇二号
○二四五(二一)六四三九

〒194

東京都町田市原町田四一四一〇(実家)
○四二七(二七)〇八〇八

矢

〒崎裕久

〒201 東京都狛江市元和泉一五一五
元和泉ハイツ二〇二号
○三(三四八〇)五三一六

鈴

〒木毅

〒215 川崎市麻生区上麻生一三五五(実家)
○四四(九八八)二一三〇

〒371

前橋市昭和町三一六一二二
ビューハイツNo.八一四〇二
○二七二(三五)五三三四

△研修医▽

小松崎

〒220

横浜市西区老松町二九〇一
野毛山マンション3D

〇四五(二三一)四四六三

勝

見直樹

〒213

川崎市高津区末長五四一―三〇二

〇四四(八五六)七八六七

宮

部聡

〒214

川崎市多摩区三田二―三―一

〇四四(九三三)三八三九

△研究生▽

木原紀子

〒213

川崎市高津区下作延三七八―三
コスモ梶が谷六〇八

△研究員▽

山田善一

〒963

福島県郡山市中町一四一―七
中町クリニック

〇二四九(三九)三三八七

曾我敏恵

〒145

東京都大田区田園調布一―五―一七―二〇二号

〇三(三七二二)七二二五

△非常勤講師▽ (アイウエオ順)

五十嵐淑晴

〒142

東京都品川区二葉三―三―一〇(自宅)
△五十嵐耳鼻咽喉科医院▽

〇三(三七八七)一二〇六

石

倉幹雄

〒145

東京都大田区北千束一―九―一七

〇三(三七一七)三四九七

巖

文雄

〒225

横浜市緑区市ケ尾町一―五三―四

〇四五(九七二)五二三〇

〒213

川崎市高津区末長一四六一―
姿見台スカイハイツアー〇三
△梶が谷耳鼻咽喉科▽

〇四四(八七七)四六二八

大

竹英夫

〒194

東京都町田市三輪緑山一―七―一

〇四四(九八七)六七〇五

小

野泰三郎

〒190

東京都立川市若葉町一―一六―一六

〇四二五(三七)三五〇六

瀬

戸院一

〒230

横浜市鶴見区東寺尾中台二〇―一三

〇四五(五八二)五六一七

〒230

横浜市鶴見区鶴見二―一―三
△鶴見大学歯学部 第一口腔外科▽

〇四五(五八一)一〇〇一

羽馬 晃

〒221 横浜市港北区師岡町南谷戸三四三―二

○四五(五三一)七九八一

〒226 横浜市緑区鴨居一―〇―九

ビントルビル 一F

△鴨居耳鼻咽喉科医院V○四五(九三三)七六七二

△東京都町田市旭町二―一五―四一

△町田市民病院 耳鼻咽喉科V

○四二七(二二二)二二三〇

吉川 由 絵

〒336 埼玉県浦和市常盤七―九―一六

〒332 埼玉県川口市西川口一―六―一

小野田ビル3F

△吉川耳鼻咽喉科医院V○四八二(五四)〇八七一

渡来 潤 次

〒181 東京都三鷹市上連雀二―四―一三

〒300 茨城県牛久市刈谷町二―一七六―二

△渡来耳鼻咽喉科医院V○二九八(七四)六八八七

△診療技術員V

久保田 成 美

〒210 川崎市幸区小向西町三―三―〇

○四四(五四四)二〇九二

山崎 圭 子

〒257 秦野市曾屋四〇七九

○四六三(八一)二八一九

久保田 恵 子

〒201 東京都狛江市岩戸北四―二―一八

ハイツ・サンフラワー二―一―

○三(五四九七)三三四九

岡本 直 子

〒233 横浜市港南区日野四―二八―一

○四五(八四三)七八六八

島山 ひろみ

〒214 川崎市多摩区生田六―一三―九

○四四(九五三)一三六三



關連病院住所録

〔分 院〕

。東 横 病 院

〒 211 川崎市中原区小杉町三一四三五

○四四(七二二)二二二二

。聖マリアンナ医大横浜市西部病院

〒 241 横浜市旭区矢指町一一九七一

○四五(三六六)一一一一

〔關連病院〕

。稻城市立病院

〒 192 東京都稻城市大丸一一七一

○四二三(七七七)〇九三一

。稲田登戸病院

〒 214 川崎市多摩区梶形六一一一

○四四(九一一)二一〇〇

。済生会川口総合病院

〒 332 埼玉県川口市西川口五一二一一

○四八二(五三)一五五〇〓三

。町田市民病院

〒 194 東京都町田市旭町二一一五一四一

○四二七(二二二)二二三〇

。聖ヨゼフ病院

〒 238 横須賀市緑が丘二八

○四六八(二二二)二一三四

。積仁会島田総合病院

〒 288 千葉県銚子市東町五一三

○四七九(二二二)五四〇一

。京浜総合病院

〒 211 川崎市中原区新城一一二一五

○四四(七七七)三二五一

編集後記

最近、当教室では海外の国際学会に積極的に参加される方が年々増加しております。そこで本号では国際学会の印象と題して、三名の先生方から原稿をいただきました。国際社における日本の役割についての議論が盛んな今日この頃、皆さんそれぞれユニークな国際交流を果たされているようであります。

また、本号より新たに教室業績表と外来担当医表を掲載することに致しました。特に担当表は、当科に患者さんをご依頼いただく際の参考にしていただければ幸いです。

飯田 順

同門会誌第二号

発行 聖マリアンナ医科大学

耳鼻咽喉科学教室

印刷 (有) 高野企画印刷社

平成四年三月

